



世界遺産熊野本宮館で法話する横田南嶺老師

もしないのであり、たゞ、その教えを  
ずっと語り伝えて、今日まで伝わっている。  
これがやはり、伝統という教えの尊いことであると思つてゐます。達磨様に直接会つた人はいなけれど、しかし、達磨様の教えを今まで語り伝えてきた。この頌徳会も、これが玄峰老師がどういう方であったか、その生涯と教えを語り伝えていくことに大きな意味

■文庫版の発生源

お生まれが本宮町湯峯で（げや）います。慶応  
2年と言いますから、1866年。江戸時代  
の終わりの終わり頃でございます。出生につ  
いては、いろんなことが言われております。  
さあやまことについての説明は今となつて  
是不可能であります、どうも生まれてすぐ  
に両本家にもらわれたといひこと、これは事

私は昭和39年の生まれでござります。玄峰老師は昭和36年6月3日にお亡くなりになつておりますので、私が直接、老師にお目にかかりたわけではございません。頌徳会から、講演のお話をいただきまして、最初は「直接、教えを受けていないので勘弁して下さい」とお断りしました。そうすると、「直接教えを受けた方は減つてるので、直接、縁のある人だけでやつていぐのでは、これから続いていきませんので、ぜひとも」とお招きをいただきました。これは非常に大切なことがあります。私もお坊さんは仏教をお釈迦様の教えを学び、またわれわれ、玄峰老師もついで(ひだり)いますが、禪宗は達磨様の教えを受け継いでおります。しかし、「私は若い頃、お釈迦様に会つたことがある。達磨

にじめに

新富市出身の臨済宗円覚寺派管長の横田南嶺老師が、田辺市本宮町の世界遺産熊野本宮館で「磨いただけの光あり、玄峰老師の教えに学ぶ」をテーマに法話した。山本玄峰老師（1866—1961年）の波瀾万丈の生涯や、自身との縁などについて語った。主催は玄峰老師頌徳会（久保隆一会長）。

た  
主  
儲  
は

実のようでもあります。どういう事情があって岡本家にもらわれたのか。捨てられて、桶こうせでいたが、温泉の地熱によって息があ

実のようでもあります。どういう事情があって岡本家にもらわれたのか。捨てられて、桶こうせでいたが、温泉の地熱によって息があ

# 山本玄峰老師の教えに学ぶ

臨濟宗円覚寺派管長  
横田南嶺老師

が、96歳でお亡くなりになるまで、多くの人たちに教えを説かれ、いろんな分野の人たちにさまざまな影響を与えたという方でござります。

## ■「耐え難きを耐え」

新聞やテレビが先の大戦を振り返る時、昭和天皇の終戦の詔勅がよく使われます。「時運の赴くところ、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、もって万世のために太平を開かんと欲す」というあの一節が必ずといっていいほど紹介されております。当時の鈴木貫太郎首相に玄峰老師が「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、この困難な時があたって下さり」と書いた手紙を出された。おそらくは、この手紙が元になっているのではないかと言われております。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ」は、われわれ禪宗では、よく使つ言葉です。達磨様が、弟子にこの言葉を言われた。この言葉をずっと禪宗の世界で語り伝えてきていたわけであります。ひじまでこれが引用されたのか、確たるものはないのですが、大きな影響をうえたのであらうと言われています。

あるいはまた、新しい憲法を作る際に、草創に関わった人が天皇陛下をどのように位置づけるかといつゝて迷った時に玄峰老師を訪ねた。すると老師は「天皇といつもののは、空に輝く象徴のようなものだ」と言われ、「象徴天皇」の元になつたとも評価されております。

## ■玄峰老師との縁

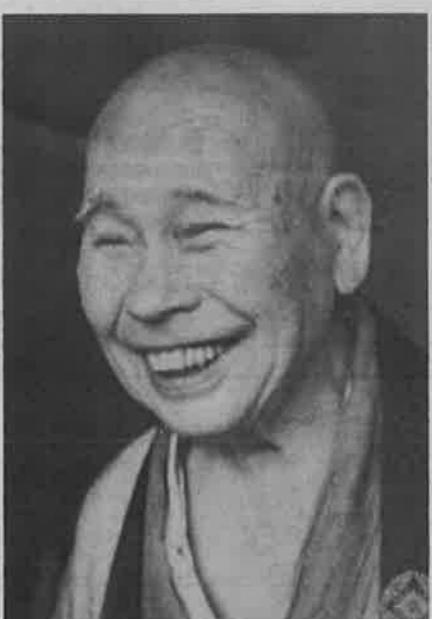
今日は「磨いたら磨いただけの光あり」という玄峰老師の教えの一一番大事なところを学びたいと思っております。

玄峰老師とのご縁で、真っ先に思い起しますのは、私は大学時代に、東京の白山道場でお坊さんになりました。そのお寺は、昭和20年まで老師が座禅の指導をなさいっていたお寺でございます。老師が東京でご指導なされていた寺といえば、今日、全生庵です。この「八百安倍首相がよく行つたられるらしいですが、老師が全生庵へ行つたのは、戦後でありまして、大正10年の56歳の頃から、戦争が終わるまでは、白山道場で座禅の指導をなさいましたそです。

今日の会場にはお寺の方も何人かお見受けられるのですが、ご法事で和尚さんがゴーンと鐘をたたきます。私のお寺の鐘は老師が喜寿のお祝いで造つた鐘でございます。私の亡くなりました師匠は、非常に細かなうるさい和尚でございまして、「鐘は打つ場所によつて音が変わる。必ずここを打つ」と一番良い音がする」と言って、そこを打つられました。その一番良い音がする場所は「玄峰老師喜寿の祝い」と書いたところでした。「玄峰老師の頭を打て」とこう言わされました。



山本玄峰老師の墓



山本玄峰老師

慶應2年、本宮町湯峯の旅館に生まれる。20歳ごろに眼病にかかり失明寸前の状態となり、四国霊場遍路などの旅に出る。高知県の雪蹊寺前で倒れ山本太玄和尚に助けられた後に出来家。玄峰の号を受けた。数寺の住職を歴任し、荒れ寺を再建。「白隱禪師の再来」「最後の禪僧」などと評価され、妙心寺の派管長も務めた。厳しい修行から培った人柄や聰明な教えは、政財界にも影響を与えた。敗戦後の日本の進路に迷った指導者たちが、老師に教えを乞うた。

## ■玄峰老師のお墓参り

玄峰老師が亡くなる20日ぐらい前に書いた

大きな字を刻んだ石碑が湯峯にあるという話を和尚さんがしました。お墓もあると聞き、一度拝みに行きたいと思い、新宮からバスに乗つて行きました。

湯峯の停留場に降りると、「玄峰塔」はすぐ分かりました。今あらためて見ると大変な字を書くことがあります。私も頼まれると大きな字を書くことがありますが、なかなか大変なんです。ああいう大きな字を書くことは、よほどの気力、体力がなければ書けるものではありません。それが96歳で亡くなるほんの20日ぐらい前に静岡県の温泉宿でお書きになつたといつゝことですから、われわれ常人を超えているとあらためて思いました。

「玄峰塔」の場所は分かりましたが、老師のお墓がどこにあるのか分かりません。たぶん塔が建つてあるお寺の周りにあるのだろうと思って見てもよく分かりません。たまたま、そこにいらっしゃった和服を着た小柄な

品の良い女性が目に入りましたので「すみません。玄峰老師のお墓はどうでございましたか」と聞きました。すると女性はびっくりされました。「あなたのようなお若いお方が玄峰老師のお墓をお参りしてくださいんであります。もともとは川原で鍛冶屋をやっていました。川原家でござります。水が出るたびに家を畳んで、かつて丘に上がつたという話を祖母からよく聞きました。そこで主に鎌を作つていました。

玄峰老師は若い頃、筏流しをしておりたということをじこざいますから、鎌のあたりで、ひょっとしたら最初のご縁があつたのでないかとひそかに思つております。

はじめて老師のことを学ぶことになりましたのは小学生の頃。私は新宮市の清閑院へ座禅に通わせていただいておりました。そこで、老師のお話を録音したテープを聴かせていただき、感銘を受けました。

その女性は当時の旅館の女将、玉置梅子さんでございました。その旅館は老師がご生前、毎年のように必ずお泊まりになつていたご縁の深い旅館でした。それですぐに、旅館の従業員の方に車を用意していただき、渡瀬のお墓まで案内していただきました。「玄峰老師のお墓にお参りするときは必ずこれを持つていきなさい。これをかけてお参りしなさい」と一合とつくりにお酒をなみなみと注いで、老師のお話を録音したテープを聴かせてもらひました。お墓から戻つてくるとお昼ご飯をいただいて、ひょとしたらお風呂も入れさせていただいたのかもしれません(笑)。不思議なご縁でござります。

そして、これも忘れないことなんですが、その時に私の顔をつらつらと見ていた女将が「私は旅館にて、玄峰老師とか、妙心寺の管長になられた山田無文老師とか、いろんな老師の方にお目にかかるつきましたが、あなたはお坊さんになる顔をしている。だから早く修行をして立派なお坊さんになつて、私たちに教えを説いてください」と初対面の高校生にこう言わされたのです。

その頃はまだ、田舎の鉄工所のせがれでありますから、「なぜ」こういうことを言われるのかなあ」と思つていましたが、あれから40年近い歳月が経ちまして、言つた通りになつたんでござります。今は女将と直接話すことはできなくなりましたが、先ほど、旅館でご位牌に手を合わせ、お経を上げさせていただきました。

山田無文老師は、当時の禪宗の世界では最高峰でした。女将は「あなた、老師に会つていいなさい」と書いてくださり、旅館の部屋でありがたいご縁をいただきました。

## ■「壁も柱も聴いている」

松原泰道先生にもよくしていただきました。初めて会つたのは中学生の時。それから孫のように大事にしていただきました。私が

今日は先生のおかげであると言つても良いぐらいです。大学時代もよく先生のところへ通っていました。非常に大事に大事にしてくれました。大学の保証人にもなってくれました。どうして全く面識のない見ず知らずの私のようなものを大事にしてくれたのか、後で分かりました。最初の頃、先生は私が行くと「あ、紀州から来た。玄峰老師のところから来てくれた」とよく言つてくださったので「さります。そして晩年こう言つていました。「自分が今日あるのは玄峰老師のおかげなんだ」と。

禅宗の世界では松原先生は、布教、説法を一生懸命なつたお方です。ただ、禅宗の世界では、説法とか、弁舌師をかつて非常に低くみていた時代がありました。やはり実践の宗教、実践の教えですから。それが、玄峰老師が80歳を超えて妙心寺の管長になられた頃、松原先生を非常に引き立てられた。40歳代だった松原先生をどこへ行くにも連れて行つた。そして自分が話をする時に「自分の話はいいから、この松原の話を聴け」と言って、引き立てられた。これで松原先生は、臨済宗の中で非常に評価されるようになっていきました。

玄峰老師に布教の眼を開いてもらつた時の話を松原先生から直接お伺いしたことがあります。戦後まだ間もない頃、確かに静岡県だったと聞いた記憶がございますが、当時としては珍しい1000人収容できる大ホールが完成した。老師をこけら落としの特別講師として招き、記念講演会を開いた。ところが、その日は大変な悪天候で4、5人しか人が集まらなかつた。老師は、いつものごとく数分間話し、「この後は松原の話を聴きなさい」と言つて譲つた。それで松原先生は1時間なり、1時間30分という講演をなさつた。「非常に話がしにくかった」と話していました。

講演の後に玄峰老師は松原先生を部屋に呼んだ。老師は、目が悪く、どれぐらいの人が集まっているか分からなかつたらしいですが、誰かから4、5人だったということを聞いた。松原先生を部屋に呼んで「あなたの話は1000人いる時も、4、5人しかいない時も少しも変わらない。なかなかできる」と言つたのですが、松原君。その一人もいない時はどうすりがとうございます」と言つて終われば良かつたのですが、松原先生は「老師、私は聴いている人がたつた一人でも話をします」と一言口をすべらせた。すると老師がすかさず「では松原君」と言つた。これは禅問答でござる」と言つた。これは禅問答でござります。

私が今日、ここ本宮町へ来る時も、えらい雨が降つておりました。雨があがり、大勢の方にお越しいただき、ありがたい限りなんですが、もし方が一、来場者が一人もいなければ話ば、私なんかなら今頃、「あづまや」の湯に浸かっていると思います(笑)。

松原先生も「さすがに一人もいなければ話

はしません」と答えたといひ、老師の雷が落ちた。「ばか者! われわれ禅宗のお坊さんは、誰がいなくても座禅をする。お念佛を唱える人は、誰がいなくても話をお念佛を唱える。松原君、誰がいなくても話をしてろ」と言つた。その後、老師は「しかし、誰もいないと思つたよ。壁も柱も聴いておるからな」と言つた。これは深い教えだと思います。

ここへ来る数日前にある方から雑誌をいたしました。田覚寺で私の話を聴いたことがありました。そして、目の見えない禅宗の老師の「誰もいないと」でも話をしろ、壁も柱も聴いておるからな」という教えが非常に心に残つたと書いていた。その後、大学を出て、いろんな仕事をしながら大変な窮地に陥る時も多々あつたけれども、そんな時に、誰も見ていない時でも壁も柱も聴いているという教えを思い出して自分は頑張ることができたと書いてくださつていて。教えを語り伝えていくことは大切なことだ、とあらためて学ばさせていただきました。

## ■玄峰老師50回忌

私は5年ほど前に田覚寺の管長に就任させていただきました。管長になって最初の公の仕事が、玄峰老師50回忌の法要に出ることでした。三島の龍沢寺でお坊さんだけで何百人も集まつたと思います。大勢の老師さま方がずらり並んでいた。しかし、どうも私の席がない。どこへ座るのかなと思つていたらお寺の方が「管長はどうぞこちらへ」と座られましたが、一番筆頭の上席でございました。管長になって初めて、臨済宗のお寺の和尚さん方の筆頭で玄峰老師50回忌の法要で焼香をさせていただきました。



本宮町湯峯の「玄峰塔」

■玄峰老師出家の理由

東京の谷中に全生庵という玄峰老師ゆかりのお寺がござります。老師の直接のお弟子で

はしません」と答えたといひ、老師の雷が落ちた。「ばか者! われわれ禅宗のお坊さんは、誰がいなくても座禅をする。お念佛を唱える人は、誰がいなくても話をお念佛を唱える。松原君、誰がいなくても話をしてろ」と言つた。その後、老師は「しかし、誰もいないと思つたよ。壁も柱も聴いておるからな」と言つた。これは深い教えだと思います。

ここへ来る数日前あるいはお寺がござります。去年のこと、全く見ず知らずの方から「ぜひ会いたい」と手紙をいただきました。その方はもう80歳を超えた現役のお医者さんでした。東京大学の学生の頃から、玄峰老師にずっとついて座禅の指導を受けていて、晩年は脈を診たり、診察をしたりして、老師のそばでいろいろ話を聴かせてもらつたそうです。私が老師との縁があると聞いて、「ぜひ語り伝えておきたいことがあるんだ」と言って、お越しになり、話を聴かせてもらつた。私もそれでいろいろなことを学んだのでございます。

その中で、今日最後にお話をさせていただきました。それは、老師の出家の因縁についてです。25歳の頃、土佐の雪蹊寺で倒れられ、太玄和尚に見込まれたとあります。玄峰老師のことを書いた書物には、「こういふ風に書かれております。岡本青年(老師)は、お寺の和尚に「自分はお坊さんになりたい」と言つた。すると和尚さんは「おまえはそうなる人間だろ」と言つた。それに対して岡本青年は「私はこぞの通り目も見えません。字も知らず、お経も読めません。こんな人間でもお坊さんになれましょつか」と。すると和尚は「普通のお坊さんにはなれないが、覺悟次第で、本当に修行をして、心の眼さえ開ければ本当のお坊さんにならなれる」と言つたと書かれています。私もそのように理解をさせてもらつた。

しかし、ちょっと冷静に考えてみると、岡本青年はびつして突然お坊さんになりたいと言つたのであつてか、どうして、和尚はいろんな人がお遍路に来ている中、「あなたはお坊さんになる人間だろ」と言つたのか。そのことについてその老医者は、老師から自分はこう聞いたと話されました。これはどこまで本当かは分かりません。ひょっとしたら、老師が気安く、一般のお坊さんの方や大勢の人の前では言わないようなことまでお語りになつたのかもしれません。

その老医者は、「玄峰老師は母に会いたい」という気持ちがあつたんだ」と言わされました。12歳の時に岡本家の養母とみえさんがわずか35歳でお亡くなりになつた。老師はこの養母の方に非常にやさしく育ててもらつた。こういうことはあまり公の場では言わないかもしれません。しかし人間というものはやっぱり弱いのですから、どうにもならない。もう自分は死ぬかもしれないというような時に、ふとお世話を思った人のこと、あるいは一番身近な母親のことを思い出したりするといふことは、決して不自然なことでも、恥ずかしいことでもないと思います。

岡本青年は10年以上前に亡くなつたお母さんに会いたいと言つた。普通であれば「無理だ」と言ひますが、和尚は「修行をすればお母さんに会える」と言つた。そこから岡本青年は、自分なりの修行をした。夜寝ずにずっと廊下の拭き掃除をやつていた。こういつこともあまり人前で話はしないと思います。自分がほとんど見えませんから、お経も読めません。おそらく自分にできることを一生懸命やつていたんだと思ひます。

「いつも最近、廊下がきれいだ」と思つていた和尚がある夜、お手洗いに起きた時にふと見ると、盲目的青年が手探りでずっと廊下や板の間を拭き続けていた。その姿を見て和尚は「これは見込みがある」と思ひた。しかし「亡くなつた母に会つ」とはそう簡単なことではありません。岡本青年は「本格的に修行をしたならば本当に会えるのかもしれない」という気持ちになり、「お坊さんに廊下を拭いている姿を知つていた和尚は「おまえはそつなる人間」である。あなたは覚悟次第で立派なお坊さん、本当のお坊さんにはなれますよ」と言つたという話を最近、老医者から教えていただきました。この話には玄峰老師の教える深いところがあると思ひます。

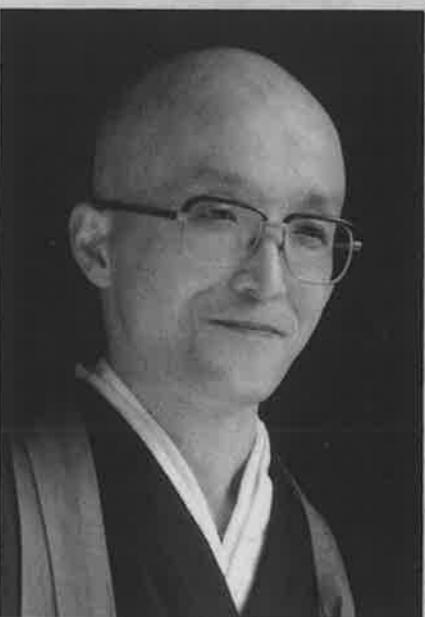
「磨いたら磨いただけの光あり。性根玉で

も何の玉でも」——。この歌は玄峰老師がよく使いになつていていたようです。それと同時に「自立たぬように、際立たぬように」と。 「あれを見よ、深山の桜咲きにけり、まい」の唄くせ「人知らずとも」——。この歌は私が松原先生からいただいた歌なので、それが松原先生から教えていただきました。この歌は玄峰老師の教える深いところがあると思ひます。

## ■「母に会つ」とは

そうして、玄峰老師は、長い長い修行を積んだ結果、晩年に「母」という言葉をよく言われたそうです。「母年を重ねるほどアリガタクなる」とこう書も残されております。 「母に会えるであらつか」——。生みの親に対する複雑な思いというものも、晩年になれば、わが子を手放さざるを得なかつた生みの母の苦勞も分かるようになつたとお書きになっています。

そして35歳といつ若さで亡くなつた育ての母親を一番思われたんだどううと思います。しかし、その母の思い、母の命というものは、今、私の命の中にはちつと流れているんだ。今、私がこうして生きているこの命こそ、母の命に他ならない」とつとに気が付くことができた。



横田南嶺老師

昭和39年、新宮市生まれ。新宮高校卒業後、筑波大学に入学。在学中に龍雲院（東京都文京区）で出家得度し、大学卒業と同時に京都建仁寺僧堂で修行。平成3年に足立大進老師のもと円覚寺僧堂で修行。11年に円覚寺僧堂師家、22年に円覚寺派管長に就任。著書に『いろはにほへとある日の法話より』（インターブックス）、『祈りの延命十句觀音經』（春秋社）、『禅の名僧に学ぶ生き方の知恵』（致知出版社）、DVDに『精一杯生きよう』（禅文化研究所）。

## ■「おかげさま」

私がここへ来る直前に94歳の玄峰老師が沼津でお話になつたテープを聴きました。終わりの方で老師は「おかけさまで」とお話をしました。「自分は若い頃ねずみ小僧になりました」と思つたことがあります。それは不慮の事故や災難で人様のためにやりたいと思つたこともあります。しかし、もしねずみ小僧になつていれば、今頃捕まつて死んでいたであろう。若い頃に目の病気になつたおかげでこうして今日、長生きさせてもらつて、みんなのお目にからせていただいている。こんなありがたいことがあります。

「母に会えるであらつか」——。生みの親に対する複雑な思いというものも、晩年になれば、わが子を手放さざるを得なかつた生みの母の苦勞も分かるようになつたとお書きになっています。

いろいろな目に遭つのが、お互いの人生であります。それは不慮の事故や災難や病気や、「なぜこんな目に遭わなければならぬのであらうか」と思うようなこともあります。けれども、ある方がこういう言葉を残しています。「どんな不幸を吸つても吐く息は感謝でありますように」。

「おかげさま」と受け止めることができた時に、本当に性根玉が光輝いて、自分自身の人間も周りの人をも照らす光になつていくということを、私は玄峰老師の96年のご生涯から学ばせていただきました。これからも少しでも多くの方々にお話をさせていただきたい、伝えさせていただきたいと思っております。今日は大変、尊い「縁」をいただきまして、誠にありがとうございました。

## ■性根玉を磨く

「性根玉は磨くだけではいけない。性根玉を自覺し悟らねばいけない。本当の自分の性根玉が解るといつでも風呂から上がりたてのよな、饅頭の蒸し立てのよなぼかぼかした樂しい気持ちがするものじゃ」。これは平井玄恭和尚が書き留めていたしゃつた老師の言葉であります。性根玉とは自分の心のことを指している。それをよく磨く。お若い頃に人知れず夜、廊下を磨いていた。こういふことはわれわれ禪宗では「陰徳」と言います。誰も見ていないところで一生懸命、廊下を磨いていく。もちろんの「」、そうしていとよりも、その磨いている人が光っていくわけです。磨いている人の心が光っていくわけであります。これが性根玉を磨く。磨いたら磨いただけの光を発していくといふことがあります。

では、光を発するといつのは、具体的にどのような時に光を発するのでありますか。「熊野の奥に生いで、筏流しや木の根掘り、盲け」。

これはお弟子の中川宗淵老師とこのお方が、玄峰老師の一生涯を実に手短にまとめた言葉です。これで全てを言つてしまふととなりしが縁にて、まいとの自明きとなりにけり」。

これはお弟子の中川宗淵老師とこのお方が、玄峰老師の一生涯を実に手短にまとめた言葉です。これで全てを言つてしまふとあります。これが性根玉といつものが光るのであります。



横田南嶺老師の法話を聴く来場者

「母」という言葉を口にしても晩年は涙ぐむほどであったといいます。母から「だいたい命」の命を精一杯生きていこう」と、母に会つ」といふことに他ならないといつこと私は思つています。